



馬耳東風

「大和は 国のまほろば たたなづく 青垣山ごもれる 大和し 美し」 倭建命が詠んだ古事記の歌だ。日本人の心の故郷としてあまりにも有名である。この地を訪れた文豪川端康成は感性を揺さぶられ、この歌を自然石に刻み、景観百選のひとつ井寺池の道端に配した。碑文は、作家の個性豊かな親しみのある原稿文字で書かれている。古代国家が誕生し、その象徴としての耳成山・畝傍山・香具山の三山が寄り添う姿は、ご神体の三輪山に控えるように大和盆地に位置付く。原点への郷愁から昨年記紀と万葉の里、「山辺の道」を歩いてみた。飛鳥地方と平城京を結ぶ史実に現れる最古の道である。路傍には彼岸花が咲き誇り、色づいた柿の実が一層の彩を添え山里の秋を演出していた。また、わが国の知性を代表する小林秀雄揮毫の「山邊道」道標は、景観によく似合い、文字から文芸評論家の滲み出るような思いが伝わってくる。山辺道勾岡上陵（やまのべのみちの まがりのおかのえの みささぎ）と記され、大きく国造りに取り組んだ第十代崇神天皇の陵墓は水青き濠に囲まれ、近隣の水田灌漑用水としても活用され、地域に密着しながら人々の生活を支えていることを知った。また、悲劇の伝説を持ち近年卑弥呼との関連で注目の箸墓古墳は、水面に無数に群れるキンギョと、巨木化した陵木のクスノキに棲みついたシラサギの姿が目立ち、岸辺の日本書紀歌碑に趣を添えている。日本の国土の景観は、世界で

最も美しいことで知られる。それとともに、人々は生活に根付いた固有の歴史を培いながら、したたかに自然と共生して生きてきた。

いささか紀行文調に記したが、新年を迎え、昨年がいかに多難な年であったかを振り返り、この緑豊かな国土に生きる人々が故郷への思いを一層新たにしたことか。人々が変化を求めて期待した新しい政権も、思いつき発言で回転扉のごとく顔が変わり、スピード感を欠き批判の対象となった。政治理念だけで世の中は回らない。海外からも軍事的政治的な圧力に危惧を持つ破目になった。今もその渦中にある。まさに想定外としてきた東日本大震災、原発事故という巨大複合災害によって、文明のあり方を改めて問い直し検証する機会となった。電気エネルギーはわずか百年の間に、人工衛星から眺めると夜も輝く明るい星を作りだした。生産活動は電力に依存し、とくに製造業は雇用を拡大しながら経済成長を支え、世界をリードする経済大国を造りあげた。工業資源小国の条件は技術立国であり、打ち勝つ安い労働力を背景とする。ここで円高は定着しつつあるようだ。TPPが堰を切ったように議論され、国益をかけて協議に参加し、加速する国際経済を模索する。企業は戦略的に海外市場を目指して展開し、産業の空洞化が進行する。美しい国土に安全安心を担保し、「絆」を一層しっかりと育てあげ、若者が真剣に輝いて目を向ける国民合意の多様な共存社会を願う壬辰の年頭である。

(柏)